大学生のキャリア教育科目の効果に関する追跡調査 I

○ 櫻坂英子¹ ・ 永作稔¹

(¹ 駿河台大学心理学部)

キーワード: 大学生、キャリア教育、キャリア・アクション・ビジョン・テスト (CAVT)

A follow-up evaluation of a career education program I

Eiko OSAKA¹ & Minoru NAGASAKU¹

(¹Surugadai Univ.)

Key Words: under graduates, career education, career action vision test (CAVT)

問題と目的

これまでキャリア教育科目は就職準備を控えた大学の高学年を中心に履修されていた。しかし近年、高等教育における教育改革の一環としてキャリア教育を必修科目として低学年から実施をする大学が増加している。このような状況下、永作・櫻坂 (2012, 2013) は CAVT を使用して、大学 2 年生に必修のキャリア教育科目の効果について量的に検証を行ってきた。CAVT は大学生のキャリア意識の発達を測定する尺度で、アクションとビジョンの下位尺度から構成される (梅澤・田澤, 2013)。永作・櫻坂の研究では、キャリア教育科目において、講義形式よりもアクティブラーニング形式のほうが学生の CAVT 得点が授業後に有意に上昇し、3 ヶ月後にもキャリア意識が維持されていた。つまり教員と受講者間の相互作用が多く生じる授業形式のほうが、受講者に有効なキャリア発達がみられ、全受講生の 52% が、教育によってキャリア発達が促進される可能性が示唆された (永作・櫻坂, 2014)。そこで本研究では、2 年次のキャリア教育の長期的影響検証する目的で、大学卒業時期に質的調査を行う。

方法

調査対象: 首都圏私立大学の心理学部に在席する大学 4 年生 123 名のうち 2 年生後期の授業開始時と終了時の 2 回の調査に回答し、CAVT プロットゾーンにプラスの変化がみられた 51 名。5 種類の変化パターンから各 2 名を調査対象とした。なおパターン 5 では調査辞退者が発生し、1 名のみを調査対象とした。

調査時期: 2015 年 1 月～2 月。

調査内容: 2 年次のキャリア教育科目の受講前、受講中、受講後の時間軸に沿って、(1) 授業について感想、(2) 自身のキャリアに関する考えや行動、(3) 実際の就職活動にキャリア教育科目がどのように役に立ったかを、半構造化面接の手法を採用し調査を実施した。面接の所要時間は平均 62.0 分 (50 分～70 分)。

結果と考察

CAVT プロットゾーンにプラスの変化がみられた 9 名に面接を行ったところ、(1) 受講前にキャリア教育科目のシラバスを読んでいなかった、(2) 受講中、少人数グループで授業内の課題について話し合いをするグループワークが苦痛だった、(3) 受講後、授業の振り返りをしなかったこと、キャリア関連の授業は 2 年次では早すぎると認識していたことが共通していた。

1. パターン 1 (C→B1)

この群は授業開始時にアクションとビジョンの両方が低い C ゾーンに位置し、授業終了時には、アクションが高くビジョンが低い B1 ゾーンに移行している。授業開始時は消極的だったが、「就職が決まった 4 年生の話聞くことができて良かった」「グループワークで緊張したが、楽しかった」。授業後にはキャリア科目受講が「ゼミ選択のきっかけ」となり、「就職活動でグループワークの経験を生かせた」など、行動

面での変化が報告された。

2. パターン 2 (B1→A)

この群は授業開始時にはアクションが高くビジョンが低かったが、授業終了時にはその両方が高くなり、A ゾーンに移行した。授業時には「5 年後、10 年後の自分の夢が近すぎて書けない」「すぐ先のことは夢に描きにくい」と感じ、グループワークにもなじみずらかった。しかし授業が進むにつれ、「グループワークの時間が短いと感じるようになった」「グループワークが就職活動に役立った」と肯定的にとらえていた。

3. パターン 3 (C→B2)

この群は授業開始時にはアクションとビジョンの両方が低かったが、受講後にはビジョンが高くなった。受講中の主たる関心は授業形式や自分の職業適性にあり、将来に向けた行動面に言及しなかった。

4. パターン 4 (B2→A)

この群は授業開始時にアクションが低くビジョンが高く、授業後にはアクションも高くなった。受講中は「グループワークが苦手だった」「授業でランダムに当てられるのが嫌だった」と能動的に授業に参加するのが難しかった。「自分の長所と短所を認識した」とこと「授業後にそれが就職活動に生かされた」ことを報告した。

5. パターン 5 (C→A)

この群は授業開始時にアクションとビジョンの両方が低かったが、授業終了時にはその両方が高くなった。「自分の性格について振り返る授業なのか?」「就職の現実的な話の授業なのか、自分を知る授業なのかはつきりしない」と授業の目的を、アクションとビジョンのどちらかに重きを置くものと認識していた。授業後には「グループワークが楽しく」「社会で働いている大人からの話がおもしろかった」と振り返った。

以上の結果から、受講生は「実際に受講すればわかる」のでシラバスをあらかじめ読まず、アクティブラーニング型の授業形式に違和感を持った。特に受講者が違和感を示したグループワークは、受講回数を重ねるとそれが楽しみに変化し、受講後には就職活動を行った際に役だったことを報告した。キャリア教育科目は将来やりたいことを明確化し、それに向けて行動する準備をするだけでなく、受講者間、受講者と教員の双方向の授業形式が、個人差はあるが受講者に長期的効果を与えたと思われる。

主要引用文献

- 永作稔・櫻坂英子 (2013). 大学 2 年生に対するキャリア教育科目の効果測定 III～対照群との比較検討～ 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, 564.
永作稔・櫻坂英子 (2014). 大学 2 年生に対するキャリア教育科目の効果測定 V～CAVT プロット分析による検討～ 日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集, 851.
梅崎修・田澤実 (2013). 大学生の学びとキャリア 法政大学出版局